

## 対話を通して学びを深める授業をめざして

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系  
教員養成特別コース

氏 名 永井佐和子

キーワード: 対話 深い学び 問い返し

実習責任教員 藤原 伸彦

実習指導教員 金森 三枝

### I 課題設定の背景

筆者の理想の授業は、児童の中で対話を生み出し、対話を通して学びを深めていけるような授業である。ここでいう対話とは、課題に対してどのように解決すればよいのかを考えて自分の意見を伝えたり、他の児童の意見を取り入れたりすることであるとする。そのような対話の中で、自分の考えを友達に話したり、友達の考えを聞いたりしたのちに、それを踏まえて新たな考え方に気がついたり、自分の考えをより具体的なものにしたり精緻なものにしたりすることが「学びを深める」ということだと考える。しかし、これまでの授業実践を振り返る中で、児童の学びが深まる以前に対話が充実していないということに気付いた。そこで授業において対話があふれるような手立てを考え、児童の思考を引き出せる問い返しを行いたいと思い、本研究課題「対話を通して学びを深める授業をめざして」を設定した。

### II 基礎インターンシップでの授業実践

小学5年算数『分数(2)』の授業を行った。本時の学習は $a \div b = \frac{a}{b}$ と表す「分数の第二義」についての学習を行った。 $2 \div 3 = 0.66\dots$ のような、商を整数やきちんとした小数で表せない場合の商の表し方を考えることをきっかけとし、(整数)  $\div$  (整数) の商は分数で表せることを

理解させることをねらいとした。

#### 【成果】

児童の発言が多くみられた。授業設計の際、児童とやり取りをしながら授業を作り上げたいという思いがあった。そのため授業設計段階では児童のつまずきを想定し、それに対して問い返すことで対話を通して学びを深めていけるよう計画した。実践時には、計画したように問い返しを行うことができ、それが児童から多くの発言を引き出すことに繋がった。

#### 【課題】

##### ①児童同士での対話が少なかった

本時のテーマが「先生を納得させる」というものであったのも大きな要因だと考えられるが、授業のほとんどが「教師対児童」という形になっていた。教師の発言186回、児童の発言263回のうち、教師対児童になっているものは145か所あったのに対し、児童対児童になっている個所は8か所しかなかった。

##### ②意見を言っていたのが教室にいる全員ではなく、ごく一部の限られた児童のみであった

その結果、授業の後半になるとものさしで遊んでいる子も見られた。教師と一部の児童だけで授業が進んでいったため、他の児童は授業に参加しているという意識が薄れてしまい、退屈してしまっただけではないかと考える。

### ③効果的な対話的学びを取り入れることができなかった

全体での話し合いの前に、「近くの子と意見を確認し合うことで自信が持て、発表しようとする児童が増えるのではないか」という思いからペア活動を取り入れた。しかし、ただ時間を取ってお互いの意見を伝えあうだけでは対話的学びとは言えない。話し合う内容を具体的に指示したり、複数の考えを比較しなければならない状況を作ったりするなど、対話的学びを充実させるためのさらなる手立てについて研究していきたい。

## Ⅲ 総合インターンシップⅠでの授業実践

小学1年国語「ねことねっこ」（1/2）の授業実践を行った。本単元は、学習指導要領、第1学年及び第2学年の内容1〔知識及び技能〕（1）に示された指導事項のうち、促音表記の平仮名の習得のために設定されたものである。「ねこ」と「ねっこ」や、「まくら」と「まっくら」のように、促音の有無によって意味が変わる言葉を正しく理解するとともに、「いっぴき」「はらっぱ」などの半濁音表記も並行して学ぶ。本時の目標は、「促音の表記を理解し、使うことができる」であった。

### 【成果】

全員が1つは促音のつく言葉を見つけて正しく書くことが出来ていた。これは、1人で書く活動に入る前のところで、子どもたちと対話をしながら進めることが出来たからだと考える。促音の基礎を抑える場面の導入で「できる」と言っている子と「無理」と言っている子がいた。その後の子どもの発言を聞いたり板書を見たりすることで「無理」と言っていた子どもも促音の表記について理解出来たため、この成果に繋

がったと考える。また、子どもの様子を確認しながら、1人で書く時間をきちんと確保できたことも要因だと言える。

### 【課題】

#### ①子どもの発言を引き出す発問や言葉がけが出来なかった

プロトコルを分析すると、子どもの発言のほとんどが「はい」や「うん」などの反応になってしまっていた。最大の原因として「いける？」「できる？」という言葉は何度も使ってしまったということが挙げられる。「いける？」という言葉は何度も言ってしまった原因として、Ⅰ.筆者が無意識に「子どもたちに分からせないといけない」と思っていたⅡ.指示が伝わっているかどうか不安だったということが挙げられる。「できる？」ではなく、「間違ってもいいから言ってごらん」という言葉のように、「ちょっと難しいかも」「間違ったらどうしよう」と思っている子が「やってみたい」「言いたい」と思えるような言葉を、これから模索していきたい。また、要となる発問を書き出すなど、発問や指示の精選も行っていきたい。

#### ②子どもの状況を正確に把握して授業を進める事ができなかった

『ねっこ』を書く活動の後「これ（まっくら）も書けそう？」と聞いたところ、できそうと答えた子が約8割、難しそうという反応を見せた子が約2割いた。その2割の子どもの反応を見て、『まっくら』も同じように全員と一緒に確認するという方法をとった。結果として時間が押してしまい、課題3のように対話の時間を設けることができなかった。しかし授業後にワークシートを見てみると、全員が正しく『ねっこ』と書くことが出来ていた。机間指導の際に、全員が書けているか正確に確認ができていれば、

子どもの難しいかも？という反応を見ても「やってみよう」という言葉がけが出来ていたのではないかと考える。

### ③子どもたちが対話する場面を設けることが出来なかった

促音の含まれる言葉を見つける活動の後、実物投影機を使いモニターに映したり、隣の子と交換して見せあったりするなど、実際に書いたものを他人に見せるという活動を行う予定であった。友達の意見を書き写したり、間違っていた時には教え合いができたからである。しかし、子どもたちの状況を適切に把握できなかったために同じような活動を繰り返してしまった結果、時間が押してしまい子どもたち同士の対話の時間を十分に確保することが出来なかった。そのため促音の含まれる言葉を口頭発表するのみにってしまった。しかし、口頭で発表するだけでは、本当に正しく書けているかどうかは分からない。また、もし友だちの意見を聞いて「いいな！書きたい！」と思っても、本時で初めて学んだ内容であるため、音声を聞いただけで正しく書ける子は少ないと考える。総合インターンシップⅡでは、授業のねらいに沿う形で、子どもたちにとって身近になっているMetaMoJiを授業に取り入れるなど、タブレットの活用も積極的に行い充実した対話につなげたい。

## Ⅳ 総合インターンシップⅡでの授業実践

小学1学年算数「たしざん(2)」(1/9)の授業実践を行った。本単元は、学習指導要領第一学年の2内容A「数と計算」(2)に示された指導事項のうち、1位数と1位数の繰り上がりのある加法を指導するために設定されたものである。和が10より大きくなる1位数同士

の加法、すなわち繰り上がりのある加法の計算方法を学習する単元である。

### 【成果】

成果として、適切な問い返しができる場面があったということを挙げる。ブロックを動かす発表の後に、なぜブロックをそのように動かしたのか問いかけた。その結果、「 $8+2$ は10」「10と1で11」という既習事項を踏まえた上でブロックを動かしたという児童の考え方を引き出すことができた。また、ペア活動の際に、自分の意見を伝えることができている子が多くいたということを挙げる。筆者が「どうぞ。」と言ってすぐに話し始めている子が多くみられた。これは、ペア活動に入る前のところで1人で考える時間をきちんと取ることができたことが要因だと考える。1人で考えるための時間を十分に取ることで、自分の考えをまとめることができたため、スムーズに話し合い活動に取りかかれたのではないかと考える。さらに、総合インターンシップⅠ(前半)の授業の反省を活かし、発問案の作成を行った。そのため、総合インターンシップⅠで行った「ねことねっこ」の実践と比べて、1つの発問・指示の長さを短くすることができた。自分の中で流れを整理したり、大切な指示や発問を整理したりすることができたからだと考える。

### 【課題】

#### ①ペア活動が始まった際に『固まってしまっている』ペアがあった

こうなってしまった原因として考えられるものを2つ挙げる。

##### I. 活動方法が子どもたちに伝わっていなかった

ペア活動に入る際、話し合いの観点を明確に提示するべきだった。ペア活動に入る前のとこ

るでとても抽象的で、分かりにくい指示をしてしまっている。ここで、例えば指示の際に黒板に貼ってあるブロックを実際に動かして見せていたら、今から何をすればよいのかが伝わりやすくなっていたのではないかと考える。

## Ⅱ. 1人で考える際に自分の考えを持ってなかったため、ペアに伝えることがなかった

普段の授業中の様子を踏まえて、机間指導で重点的に見る子どもを決めておくことで、適切な言葉がけができていたのではないかと考える。

### ②子どもの考えを引き出す問い返しができず、子どもの発表を無かったものにしてしまった

全体での意見共有の際、数えたしをした子、10のまとまりを作って考えた子の順に取り上げることで、数えたしをしていた子が、10のまとまりをつくることの良さに気付けるようにしたかった。そのため、個人で考える活動の際に数え足しをしていた男児を最初に指名した。男児が発表でブロックを動かした後、「どうですか?」と問いかけるとみんな「同じです」という反応をしていた。本当はここで「他にもあります」という声を引き出し、10のまとまりを作ればよいことに気づいていた児童に発表させたかった。しかし、筆者はみんなの「同じです」という言葉に動揺してしまい、男児の考えを聞かずに席に帰ってしまった。筆者が想定していた流れにするためには、ここで男児の考え方を全体で共有することが必要不可欠であった。

### ③学びが深まる大切な場면을筆者が説明してしまった

筆者が長々と話し過ぎてしまったため、授業中の子どもたちの目がだんだん暗くなっていったり、反応が薄くなっていったりしているのを感じた。ここではもっと子どもたちに問い返し

をして、子どもたちから重要なワードを引き出すべきであった。「8 + 2 ってなんのことかわかる?」と問いかけた後に「はい」「わかる」と言った子に対して、「8 + 2 ってなんのことなん?」などと問い返すことで、子どもたちから「8と2で10になるから」「10にするため」などのような「10」に着目した言葉を引き出すことができていたのではないかと考える。

## V 今後の展望

本研究を通して特に大切だと感じたことを3つ記しておく。

1つめは、発問・指示についてである。これまでの授業実践で発問や指示を練る際、「こんな指示をして、あんな指示をして、,,」のように、教師の目線で考えることが多かった。今後は、子どもの姿や思考から発問や指示を考えていきたい。

2つめは、問い返しについてである。その時間内において大切なキーワードを子どもたちから引き出すために、「それってどういうこと?」などの問い返しを徹底して行いたい。そうすることで、子どもたちの思考を深めることにつなげ、より多くの考えや発言を引き出していきたい。

3つめは子どもの実態把握についてである。学級全体で対話をして学びを深めるために、筆者自身が1人ひとりの子どもたちが何を考えているのかを把握することが大切だということを身をもって感じた。

上記の3つのことをまずはしっかりとできるようにしていきたい。そして、日々の振り返りを大切にしながらこれからも常に学び続け、進化し続けられるような教師を目指す。